

オレンジボウルの歴史

Junior Orange Bowl Tennis Championships

全日本チャンピオン、デ杯&フェド杯代表を輩出してきたジュニアテニスの登竜門

70年の歴史を持つ世界舞台への登竜門

毎年12月のクリスマスシーズンに米国・フロリダ州で開催される『ジュニア・オレンジボウル国際テニス選手権』は、グランドスラムイベントに次ぐ国際テニス連盟(ITF)グレードAに区分されるジュニアテニス最高峰のトーナメントとして“オレンジボウル”の名称で広く知られている。テニスボールの“BALL”ではなく、収穫したオレンジを入れる大きな“BOWL”が大会名の由来なので「オレンジボウル」と書くのが正しい。

歴代優勝者にはクリス・エバート(1969、70年・米)、ピヨン・ボルグ(72年、スウェーデン)、ジョン・マッケンロー(76年、米)、イワン・レンドル(77年、チェコ)、ガブリエラ・サバティーニ(84年、アルゼンチン)、ジム・クワリエ(87年米)、ロジャー・フェデラー(98年スイス)などのNo.1プレーヤーたちが名を連ねる、世界舞台への登竜門的なジュニアトーナメントである。

第1回オレンジボウルの開催は1947年。エディ・ハー氏が、当時熱心にテニスをしていた娘の出場する大会が地元にならないうちから設立したもの。スタートから約30年にわたってトーナメントディレクターを務めたエディ氏は、ジュニア男子団体戦の『サンシャインカップ』や、ジュニア女子団体戦の『コンチネンタル・プレーヤーズカップ』の創設者でもある。

当初はアメリカンフットボールなどの競技と一緒にマイアミ地域でクリスマスシーズンに開催される子どもたちのための催し物(イベント全体が“オレンジボウル”と呼ばれている)の一つにすぎなかった。海外選手の出場

も認められていたものの参加者は少なく、部門も男女16歳以下と18歳以下の2クラスだけ。現在のように12歳以下のクラスから設けられたのは1950年代になってからで、本格的なインターナショナルトーナメントとしてその地位を確立させたのはテニス大会のオープン化、テニスプレーヤーのプロ化が進む60年代に入ってからのことだった。ちなみに、91年大会のゴルフ部門ではタイガー・ウッズが優勝している。

オレンジボウルで活躍した日本選手たち

■日本人初出場は1959年の菅(法政二高)、松本(甲南高)

オレンジボウルに日本人選手が初めて挑んだのは1959年のこと。法政二高の菅清吉(現姓・森)と甲南高の松本鐵一が出場し、菅はベスト8、松本が2回戦、2人が組んだダブルスでベスト8という記録を残している。清水善造、佐藤次郎などの名選手に続く国際的テニスプレーヤー育成のために、日本テニス協会が初めて行った海外ジュニア派遣だったが、当時の思い出を振り返るインタビューがテニス雑誌(1983年テニスクラシック3月号)に掲載されているので転載しておこう。森(旧姓・菅)「飛行機代は別にして、協会から当時のお金で1人50ドルを持たされて、それでアメリカ、



▲出発前、羽田にて
写真提供:テニスクラシック

【オレンジボウル 18歳以下男女シングルス歴代優勝者】

回数	開催年	男子優勝者	女子優勝者	回数	開催年	男子優勝者	女子優勝者
第1回	1947	L. マックマスターズ(米)	J. ジョンソン(米)	第36回	1982	G. フォルジェ(仏)	C. バセット(米)
第2回	1948	T. ボーイス(米)	M. ラミレス(メキシコ)	第37回	1983	K. カールソン(スウェーデン)	D. スペンズ(米)
第3回	1949	G. ボグレイ(米)	E. レヴィッキー(米)	第38回	1984	R. ブラウン(米)	G. サバティーニ(アルゼンチン)
第4回	1950	J.R. グリグビー(米)	T. グリーンバーグ(米)	第39回	1985	C. ピストレージ(イタリア)	M.J. フェルナンデス(米)
第5回	1951	S. ジアマルバ(米)	C. ファヘロス(米)	第40回	1986	J. サンチェス(スペイン)	P. タラビニ(アルゼンチン)
第6回	1952	E. ルビノフ(米)	C. ファヘロス(米)	第41回	1987	J. クワリエ(米)	N. スヴェレワ(ロシア)
第7回	1953	M. グリーン(米)	P. シャファー(米)	第42回	1988	M. ロセ(スイス)	C. カニングハム(米)
第8回	1954	A. ケイ(米)	M. ストック(米)	第43回	1989	F. メリゲニ(ブラジル)	L. スパディア(米)
第9回	1955	M. グリーン(米)	M. アーノルド(米)	第44回	1990	A. メドベデフ(ロシア)	P. ペレス(スペイン)
第10回	1956	C. フェルナンデス(ブラジル)	M.A. ミッチェル(米)	第45回	1991	M. シャルペンティエール(アルゼンチン)	E. リホフスツェワ(ロシア)
第11回	1957	C. クロフォード(米)	M.E. プエノ(ブラジル)	第46回	1992	V. スパディア(米)	B. ムレジ(スロベニア)
第12回	1958	R. パルネス(ブラジル)	C. ハングス(米)	第47回	1993	A. コスタ(スペイン)	A. モントリオ(スペイン)
第13回	1959	J.R. アリーリャ(スペイン)	S. ウォーショウ(米)	第48回	1994	N. ラベンティ(エクアドル)	M. ラモン(スペイン)
第14回	1960	B. ルヌワール(米)	C.A. プローセン(米)	第49回	1995	M. ザバラタ(アルゼンチン)	A. クルニコフ(ロシア)
第15回	1961	M. ベルギン(米)	J. アルバンス(米)	第50回	1996	A. マーチン(スペイン)	A. アルカサル(スペイン)
第16回	1962	A. ローチ(米)	S. デフナ(米)	第51回	1997	N. マスー(チリ)	T. ビスニク(スロベニア)
第17回	1963	T. コチ(ブラジル)	P. パートコヴィッチ(米)	第52回	1998	R. フェデラー(スイス)	E. デメンディエフ(ロシア)
第18回	1964	M. ララ(メキシコ)	P. パートコヴィッチ(米)	第53回	1999	A. ロディック(米)	M. マルチネス(スペイン)
第19回	1965	I. エルシャーフ(エジプト)	P. パートコヴィッチ(米)	第54回	2000	T. エネウ(ブルガリア)	V. スボナレワ(ロシア)
第20回	1966	M. オランダス(スペイン)	P. パートコヴィッチ(米)	第55回	2001	R. ソダーリン(スウェーデン)	V. スボナレワ(ロシア)
第21回	1967	M. エステップ(米)	P. ホーガン(米)	第56回	2002	B. ベイカー(米)	V. ドゥッシェビナ(ロシア)
第22回	1968	R. ストックトン(米)	P. モンターノ(メキシコ)	第57回	2003	M. バグダティス(キプロス)	N. バイディソフ(チェコ)
第23回	1969	H. ソロモン(米)	C. エバート(米)	第58回	2004	T. ネイリー(米)	J. カーランド(米)
第24回	1970	H. ソロモン(米)	C. エバート(米)	第59回	2005	R. ロシャード(スイス)	C. ヴォズニアッキ(デンマーク)
第25回	1971	C. パレズッティ(イタリア)	D. ガンツ(米)	第60回	2006	A. ランカヌ(ルーマニア)	N. ホフマノフ(オーストリア)
第26回	1972	B. ボルグ(スウェーデン)	D. ガンツ(米)	第61回	2007	R. ベランキス(リトアニア)	M.L. デ・プリト(ポルトガル)
第27回	1973	W. マーチン(米)	M. ヤウソベック(ユーゴスラビア)	第62回	2008	Y. アンバリ(インド)	J. ボーエラップ(米)
第28回	1974	W. マーチン(米)	L. エプスタイン(米)	第63回	2009	G. ミナ(仏)	G. ダブロウスキ(カナダ)
第29回	1975	F. ルナ(スペイン)	L. エプスタイン(米)	第64回	2010	G. モーガン(英)	A. デイビス(米)
第30回	1976	J. マッケンロー(米)	M. クルーガー(南ア)	第65回	2011	D. ティエム(オーストリア)	A. コンタベイト(スペイン)
第31回	1977	I. レンドル(チェコ)	A. スミス(米)	第66回	2012	L. ジェール(セルビア)	A. コユ(クロアチア)
第32回	1978	G. ウルビ(スペイン)	A. イエガー(米)	第67回	2013	F. ティアフォー(米)	V. フリソク(ロシア)
第33回	1979	R. ヴィヴェール(エクアドル)	K. ホーバス(米)	第68回	2014	S. コスロフ(米)	S. ケニン(米)
第34回	1980	J. ニーストロム(スウェーデン)	S. マスカリン(米)	第69回	2015	M. ケチマノビッチ(セルビア)	B. アンドレースク(カナダ)
第35回	1981	R. アルグエロ(アルゼンチン)	P. バーグ(米)	第70回	2016	M. ケチマノビッチ(セルビア)	K. ジュバン(スロベニア)

メキシコで50日間過ごしたのを覚えています。(中略)今みたいに付き添いの人はなくて、松本鐵一君と2人での遠征で、宿泊はすべてホームステイ。僕らが泊まったのは、現在プロ選手のあのブライアン・ゴットフリート(1970~85年にプロテニスプレーヤーとして活躍。世界ランキング最高位はシングルス3位、ダブルス2位)の家だったんです。ブライアンはまだ7歳のわんぱく盛りで、帰り際に記念として家に僕らのラケットをプレゼントしてきたんです。だから、僕らがあの家に泊まらなかったら、ブライアンは今ごろテニスをやっていないんじゃないかと思いませんか。試合では好成績をあげられましたが、シングルス準決勝でギスパートに0-6、0-6で負けたのがすごくショックでした。逆にうれしかったのは、結婚してアメリカに住んでいる元歌手の日本人女性が、僕らの活躍を新聞で読んでおにぎりを持ってきてくれたことです」

■1967年沢松和子の優勝と72年王者ボルグを苦しめた待鳥

オレンジボウルのシングルス歴代優勝者に名を連ねた日本選手は、1975年のウィンブルドン複を制した沢松(現姓・吉田)和子ただ一人。女子ジュニアとして初めて派遣された66年大会で、16歳以下シングルスでベスト8、姉・順子と組んだ18歳以下ダブルスでベスト4の結果を残すと、翌67年大会は16歳以下シングルスに優勝、英国のコーニー・モルスワースと組んだ18歳以下ダブルスで優勝し、クラス違いの二冠を達成している。



▲1967年オレンジボウル大会に出場した、平井健一、吉井栄(監督)、沢松和子。沢松和子は16歳以下単で優勝、英国のモルスワースと組んだ18歳以下複も優勝

優勝こそ逃したものの、沢松が初出場した66年大会では平井健一(法政二高)が16歳以下男子シングルスで準優勝。その後、72年大会では後のスター選手と名勝負を演じた男子選手の活躍が話題となった。72年大会に出場した待鳥明史が、18歳以下男子シングルスで4回戦を

勝ち抜き、準々決勝でビヨン・ボルグと2-6、6-7の熱戦を繰り広げたのだ。

「ボルグは当時もうデ杯選手で、プレースタイルも今とまったく同じ。コートのかなり後方にいないと、ボールが高くバウンドするので打ちにくかったですね。1セット目2-6で取られましたが、2セット目は一時リード。すると“日本選手がリードしている”というアナウンスが会場に流れ、観客が一斉に集まってきたのを覚えています。結局、2セット目はタイブレークに入って敗れてしまいましたが、僕は強い選手と試合するとわりと善戦していたので、それほど力の差は感じませんでした」(1983年テニスクラシック3月号より)

その後、1985年大会で太田茂がアメリカ人選手(ガーナー)とのペアで18歳以下男子ダブルスに優勝。日本人男子として初のオレンジボウルチャンピオンとなったが、このとき決勝を戦ったのは松岡修造と甘露寺重房のペアだった。近年では、2003年に錦織圭が準優勝(男子14歳以下シングルス)、森田あゆみが3位入賞(女子14歳以下シングルス)。登竜門としてのオレンジボウルに挑む日本選手たちの挑戦は今もなお続いている。



▲前列向かって左から松岡修造、太田茂、辻野隆三、甘露寺重房、横田光子、飯田栄、木戸脇真也と世界各国から集まった選手達



▲1972年オレンジボウル出場の日本チーム。左から坂本(真)、待鳥、坂本(京)

▼待鳥明史は1972年大会で5回戦進出



▲第1シードのボルグ率いるスウェーデンチームを破った。左から坂本、ボルグ、一人置いて待鳥、コンステッド

▼試合の合間に宿題。向かって左から辻野隆三、甘露寺重房



オレンジボウル 日本人記録											
年	種目	名前	記録	年	種目	名前	記録	年	種目	名前	記録
1959	男子シングルス	菅 清吉	ベスト8	1970	男子シングルス	八木沢恭司	1回戦	1981	男子シングルス	武鐘正芳	2回戦
	男子ダブルス	菅・松本	ベスト8		男子ダブルス	太田正孝	2回戦		男子ダブルス	中村聡一	1回戦
1960	男子シングルス	田中久雄	1回戦	男子ダブルス	中島幸彦	2回戦	1982	記録不明			
	男子ダブルス	渡辺康二	4回戦		八木沢・マーシー(インド)	2回戦		男子シングルス	太田 茂	1回戦	
1961	男子シングルス	渡辺・田中	ベスト8	1972	男子シングルス	坂本京一	3回戦	男子ダブルス	土橋登志久	1回戦	
	男子ダブルス	井上・中山	3回戦		坂本真一	3回戦	女子シングルス	太田・土橋	4回戦		
1962	男子シングルス	浅田伸二	4回戦	1973	男子シングルス	待鳥明史	5回戦	女子ダブルス	飯田 栄	2回戦	
	男子ダブルス	古林・浅田	3回戦		陸浦隆繁	4回戦	男子シングルス	飯田 栄	2回戦		
1963	男子シングルス	浅田伸二	3回戦	1974	男子シングルス	藤田典之	2回戦	女子ダブルス	飯田 栄	2回戦	
	男子ダブルス	内藤義雄	1回戦		吉田昇生	1回戦	男子シングルス	飯田 栄	2回戦		
1964	男子シングルス	浅田伸二	4回戦	1975	男子ダブルス	吉田・江見	1回戦	男子シングルス	飯田 栄	2回戦	
	男子ダブルス	神和住純	3回戦		江見浩平	3回戦	男子ダブルス	飯田 栄	2回戦		
1965年 記録不明				1976	男子シングルス	吉田昇生	3回戦	1983	男子シングルス	太田・土橋	4回戦
男子シングルス	平井健一	準優勝	中西伊知郎		2回戦	女子シングルス	飯田 栄		2回戦	男子ダブルス	飯田 栄
1966	女子シングルス	吉井 栄	3回戦	男子ダブルス	米沢 徹	2回戦	1984	女子ダブルス	飯田 栄	2回戦	
	女子ダブルス	不明	不明		村田有季彦	2回戦		男子シングルス	松岡修造	1回戦	
1967	男子シングルス	沢松和子	ベスト8	女子シングルス	竹内 一	1回戦	男子ダブルス	太田 茂	2回戦		
	女子ダブルス	沢松・沢松	ベスト4		古橋富美子	1回戦	女子シングルス	太田・松岡	2回戦		
1969	男子シングルス	平井健一	ベスト8	男子ダブルス	池本・古橋	ベスト8	女子ダブルス	甘露寺・面野	2回戦		
	男子ダブルス	田辺 清	ベスト32		藤田秀丸	2回戦	男子シングルス	飯田 栄	1回戦		
1979	男子シングルス	平井・田辺	ベスト8	1978	男子シングルス	須原久勝	1回戦	女子ダブルス	横田光子	2回戦	
	女子シングルス	沢松和子	優勝		男子ダブルス	藤田・須田	1回戦	男子シングルス	山口・広瀬	1回戦	
1985	男子シングルス	沢松・モルスワース(英国)	優勝	女子ダブルス	吉田・須田	1回戦	男子ダブルス	山本育史	2回戦		
	男子シングルス	荒巻政昭	1回戦		吉田・宗高	2回戦	女子シングルス	増田 健太郎	1回戦		
1990	男子ダブルス	グリーンデル(豪)・荒巻	2回戦	男子シングルス	西野真一	2回戦	男子ダブルス	増田 山本	2回戦		
	男子シングルス	二本松一	1回戦		千田治郎	1回戦	女子シングルス	平木理化	3回戦		
1998	男子シングルス	西野・二本松	2回戦	女子シングルス	吉田・ホー(台湾)	1回戦	男子ダブルス	山口涼子	1回戦		
	女子シングルス	井上悦子	3回戦		西野真一	1回戦	女子ダブルス	柴田 薫	1回戦		
2003	男子シングルス	岡本久美子	1回戦	女子ダブルス	二本松一	1回戦	男子シングルス	伊東 新	3回戦		
	女子ダブルス	井上・岡本	ベスト8		西野・二本松	2回戦	男子ダブルス	日置映正	1回戦		
2008	男子シングルス	井上・岡本	ベスト8	女子シングルス	西野・二本松	2回戦	女子シングルス	日置映正	1回戦		
	女子シングルス	井上・岡本	ベスト8		西野・二本松	2回戦	男子ダブルス	伊東・日置	2回戦		
2013	男子シングルス	井上・岡本	ベスト8	女子ダブルス	西野・二本松	2回戦	女子シングルス	平木理化	2回戦		
	女子シングルス	井上・岡本	ベスト8		西野・二本松	2回戦	男子シングルス	伊東・日置	2回戦		
2018	男子シングルス	井上・岡本	ベスト8	女子ダブルス	西野・二本松	2回戦	女子シングルス	伊東・日置	2回戦		
	女子シングルス	井上・岡本	ベスト8		西野・二本松	2回戦	男子ダブルス	伊東・日置	2回戦		
2023	男子シングルス	井上・岡本	ベスト8	女子ダブルス	西野・二本松	2回戦	女子シングルス	伊東・日置	2回戦		
	女子シングルス	井上・岡本	ベスト8		西野・二本松	2回戦	男子ダブルス	伊東・日置	2回戦		